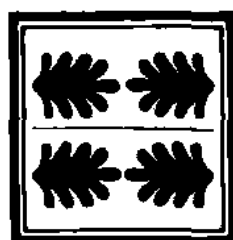


論語知らずの 論語読み

阿川弘之



阿川弘之〈著者〉大正9年(1920)広島県生
れ。作家。芸術院会員。著書に「年年歳歳」
「春の城」「雲の墓標」「舷燈」「山本五十六」
「暗い波濤」「犬と麻ちゃん」(以上小説)、「あ
くび指南書」(随筆)等多数。



講談社文庫

ろんごし ろんごよ
論語知らずの論語読み
あがわひろゆき
阿川弘之

昭和56年6月15日第1刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Hiroyuki Agawa 1981

Printed in Japan

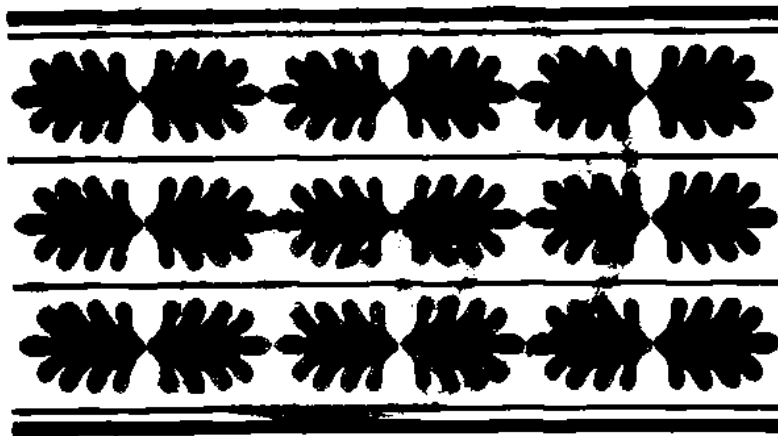
0195-316992-2253 (0) 定価360円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えします。

講談社文庫

論語知らずの論語読み

阿川弘之



講談社

はしがき

お読みいただければ分るように、論語の言葉をダシにして書き綴った、その日その日の随想です。子路、子貢、顔回——、孔子さまの弟子の代りに登場するのは、私の友人の奇人変人たちで、論語の内容とあまり深い関係はありません。各節のはじめに論語の原文をかがけましたが、字句の説明はしませんでした。煩わしければ飛ばして読んで下さって結構だと思います。私自身よく分らないところが多いのですから。

しかし、聖人の書と言われたこの中国の古典を、私はないがしろに考えているわけではありません。何といっても二千五百年前の人類の、すぐれた知恵の言葉です。興味を持たれた方には、然るべき解説書をごらんになることをおすすめていたします。

昭和五十二年六月

阿川弘之

論語知らずの論語読み

目次

はしがき

序説

学而篇

為政篇

八佾篇

里仁篇

公治長篇

雍也篇

述而篇

泰伯篇

子罕篇

三 九 二二 四九 七六 九三 一二二 一三六 一五七 一九五 二〇七

郷党篇	二二九
先進篇	二三〇
顔淵篇	二四二
子路篇	二六〇
憲問篇	二七二
衛靈公篇	二八四
季氏篇	二九六
陽貨篇	二九九
微子篇	三〇七
子張篇	三二〇
堯曰篇	三二九

卷末エッセイ

杉鉄砲と孔子さん

駒田信二 三三三

序説

「君たち、論語を知ってるか」

うちへ遊びに来た豚児とんじのガールフレンド、豚女のボーイフレンドたちに訊ねてみた。

「知ってます」

と言う。

「知ってるわよねえ、論語ぐらい」

「よろしい。そこで質問だが、論語の中のどんな言葉が印象に残ってる？ 好きな言葉、面白い

と思った言葉——」

「好きな言葉ですか？」

「そう、感銘を受けた言葉、或あるは逆に反発を感じた言葉でもいい」

「さあ……、そう言われると、ちょっと」

「君は？」

「さあ」

全員れっきとした大学生なのに、

「あんた、どう？」

「分ない」

と、だんだん声が小さくなった。うちの豚児豚女は初めから逃げている。

「そうかなあ。『朋アリ遠方ヨリ来ル、亦樂シカラズヤ』とか、そういうのの二つや三つ知らんかね。諺ことわざみたいなもんだぜ」

「知りません。論語がどうかしたんですか」

「今、僕は論語の話を書きかけてるんだよ」

「論語の本を？」

「『論語の本』と、あらたまって言われると困るんだが、ついては君ら若い人たちの感想を参考にしてみようと思ったのに、何ンにも知らないんじゃないかな」

「すみません」

別に謝るには及ばない。私にしたって、素読そどくの経験なぞ持ち合せていない。明治育ちの文士あたりから見れば、無知にひとしいにちがいない。にもかかわらず、私どもにとって論語は、長い間ある意味でずいぶん身近な書物であったという気がする。

戦前、旧制高等学校の生徒は、よく「デカンシヨ節」なるものを歌ったが、あの中にも論語が出て来る。

「論語孟子を読んではみたが

酒を飲むなと書いてない

ヨーイヨーイ、デッカンシヨ」

論理学に「権威に訴える誤謬」というのがあって、こういうロジックは成り立たないのだけれど、とにかく論語の権威を認めていた。

俗説によれば、「デカンショ」はデカルト、カント、ショーペンハウエル、
「デカルト、カントを読んではみたが」

では、あまり権威に訴えられた感じがしない。

私ども日本人の場合、キリスト教徒の「聖書」にあたるものは、仏典よりむしろ論語だったのではないかと思うことがある。

文学作品の中にしばしば引用される点では、時代がちがうけれど、西欧文学におけるシェークスピアに似ているかも知れない。日本人の作家なら、間接的にもせよ、生涯に二度や三度、論語の言葉を引き合いに出してものを書いたことはあるだろう。

たとえば、小説の中に、

「女子と小人は養いがたいよ、君」

「まったくだ。すぐ怨むからね」

こういう会話があったとすれば、単に字づらだけの意味ではなく、当然論語「陽貨篇」の孔子の言葉を踏まえていた。余計な説明が無くても私たちには分るし、説明があつては煩い。

それが、三十年ばかり前からそうでなくなってしまうたらしい。

話が飛ぶけれども、ウイスキーの宣伝会社に勤めている友人が、ある時、

「厚意謝するに余りあり」

という大きな新聞広告を出した。

お歳暮せいぼか何かはそのウィスキーをもらった人が、喜んで、「厚意謝するに余りあり」と言っているというしつらえであった。

「なかなか洒落しゃれてたね、あの広告」

私が讃ほめると、

「そう思ってくれるでしょう。それが実は大失敗」と、友人は苦笑にがわらいをした。「何のことか、今の若い人にはもう分らないんだよ。『どういう意味ですか、あれ?』って言われてくさったね、僕は」

分らなくては困るから解説しておくが、これは佐佐木信綱作詞の古い小学唱歌「水師すいし營えいの会見」からの引用句である。

明治三十八年一月、「旅順開城約成りて」露將ステッセルは乃木希典のぎ まれすけ大将と水師營に会見する。
「昨日きのうの敵は今日の友」、自分の愛馬を記念に進呈したいと申し出たステッセル將軍に対し、乃木將軍が答えたのが、

「厚意謝するに余りあり」

軍のおきてに従って他日私のところへ頂くことになったら、「永くいたわり養わん」――。
ある年代をさかいにして、こういうことが全く通じなくなってしまった。

「すると、君たちはあれかい、論語をただ古典の名前として知ってるだけ?」

「まあそうです。すみません」

もう一度謝っておいてから、

「だけど小父^{おじ}さん」

と、豚友の一人が反論した。

「何ンにも知らないって言うけど、それは小父さんにロックのこと聞いても何もご存じないのと同じじゃないですか」

「ロックとは何だ？」

「いやだなア、ロックン・ロールのロックです」

「君ねえ、いくら何でも、ロックン・ロールと論語といっしょにするなよ」

もっとも、「何ンにもご存じない」ことにかけては、同業の文士の中に私をしのぐのが何人かいて、論語もロックも、どちらも知らない。

「ああ、論語か、孔子さんね。あの人も色々苦勞したんだろうな」

と言った友人がある。

「苦勞って、何が？」

「だって、『女子と小人』で苦勞したんじゃないか。小人というのは君、要するにオカマのことだろ」

私は少し考えこんだ。

論語に関し、多少とも古今の典籍を見ていれば、「女子と小人」の小人がオカマだなどという奇説は出て来ない。出て来ないけれども、これを一概に笑い捨てていいかどうか、少くとも私には判断がつかない。

そういえば、ロックについても、孔子が音楽に造詣ぞうけいが深かったのはよく知られている事実で、もし今の世に生を享うけてロックを聞いたら、鄭声ていせい——、みだらでけしからん音楽としてこれを却しりぞけたか、意外に面白がつて耳傾けたか、やはり一概には言えないような気がする。

川端康成さんは、「古都」とか「山の音」とか、日本の古い美しさを愛めでた静かな作品を書いているくせに、変なものが好きであった。

音の洪水で鼓膜こまくの破れそうな赤坂「夢幻」などというゴーゴー・バアに、無理矢理連れて行かれて閉口したことがある。

「面白いんですか？」

「面白いですな。足の先から音楽が入って来ます」

ロックは鄭声である、小人はオカマの意味ではないと、私が言い切ることが出来ないのは、結局無学のせいであろう。

身近な書だったとはいふものの、私などが論語とかかわっていたそのかわり方には、

「おい、阿川、義ヲ見テセザルハ勇無キナリだぞ」

学生時代の話だが、

「なにイ、そんなこと言うんなら、見てろ。やってやる」

と、多分に熊公八公的なところがあった。

熊公的とはいえ、格言や語録のたぐいは——、殊にそれが時代の通念にマッチし、権威あるものとして受け入れられている場合は、人をこういう風に反応させかねない魔力を持つ。

しかし、齡知命れいちめいを過ぎて論語の言葉をあれこれ拾い読みして見ると、自分がもう、その種の魔

力からはいくらか自由になっていると感じることもあるし、無学は無学なりに疑問をいだく箇所もある。

「孔子さま、あなたそう仰有いますが」

とか、

「朱子さん、あなたはそう説明なさいますがねえ」

と言ってみたい場面にぶつかる。

私が我流論語を書いてみる気になった所以の大半はそれなのだが、御本家の方での孔子批判の風潮とこれとは全く無関係である。新しく訓詁注疏の試みを起す気も、もとより無い。そんなことは、やれと言われても出来ることでない。

かと言って、好んで奇説を弄しようとは思わぬし、「私の論語」を落語仕立てにするつもりも無い。

ただし、豚児の友人どもがあてにならぬ以上、折にふれて意見を徴してみたいと思う人物はいらる。落語仕立てにしないと言いながら恐縮だが、その一人が「小人才カマ」説の上野毛の隠居で、私はロックについても隠居の意見をただして見た。

「あれは、そもそも瓢箪池をつぶしたのがいけないよ」

と隠居は言った。浅草六区のことだと思っっているらしかった。

そのほか、町田の大家さん、松原万峯楼の若旦那、本屋の赤門堂——、いずれも我が強いくせに無学で（赤門堂だけが例外）、試みに論語の話をしてみると、甚だ奇怪な説を並べ立てる。一考